

令和7年度血液製剤使用実態調査報告

20床未満の診療所での輸血実施状況について
(在宅輸血を含めて)

テーマ設定の背景

- 日本では輸血療法の実施はライセンス制ではなく、諸外国よりも輸血実施医療機関数が多い。
- 2006年に輸血管理料が保険収載され、主に中規模以上の病院で輸血管理体制が整備され、血液製剤の適正使用も進んだ。
- 最近、国の方針の下に在宅医療が推進され、東京都の輸血状況調査では在宅輸血が増加しているとのデータがある。
- また、以前より診療所では輸血管理体制（血液製剤の保存や輸血検査）や輸血実施体制（人員、マニュアル類の整備）に関して課題があることが指摘されている。
- 今回、直近5年間の診療所での実施状況の推移について報告する。

本実態調査の調査期間と調査方法

【調査期間と内容】

2020年度～2024年度までの5年間（各年度に前年度のデータ収集する形式；2025年度の調査で2024年度の情報を得る）の血液製剤の使用状況と輸血管理・実施体制などについて調査した。

【調査方法】

各年に日本赤十字社より輸血用血液の供給を受けた全医療機関のリストを国から提供いただき、仕様書に準じて調査票を作成し、全医療機関に依頼状を郵送した。回答は日本輸血・細胞治療学会のホームページ上のWEBへの入力、あるいは回答を記載した文書の返送により行った。

なお、本年度は調査票を20床未満施設用（125項目）と20床以上施設用（173項目）に分けて調査を行った

図1 輸血実施施設数と調査回答率の年次推移

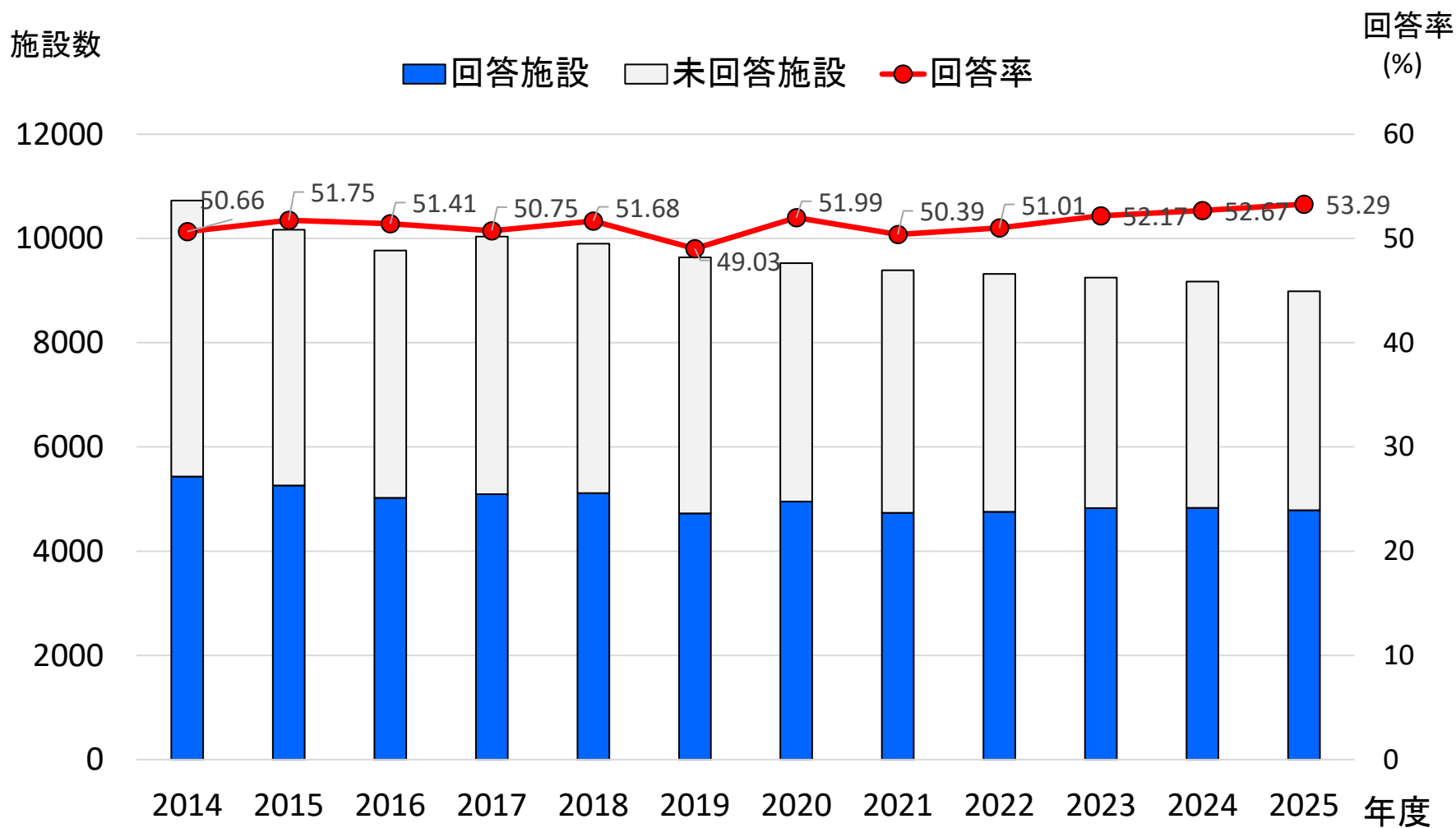


図2 輸血実施施設の病床群別分布と回答率

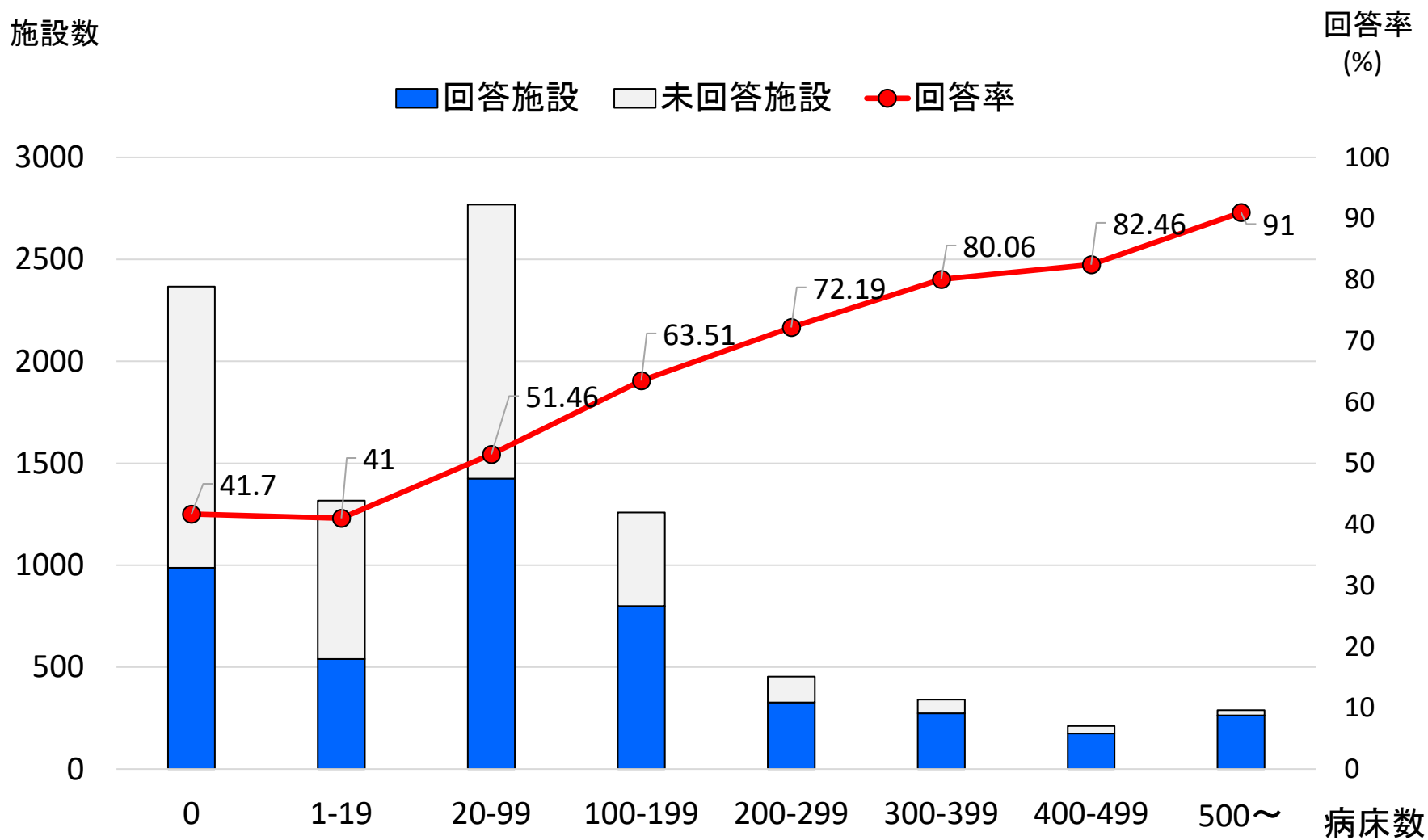


図3 各血液製剤使用量(有床診療所)

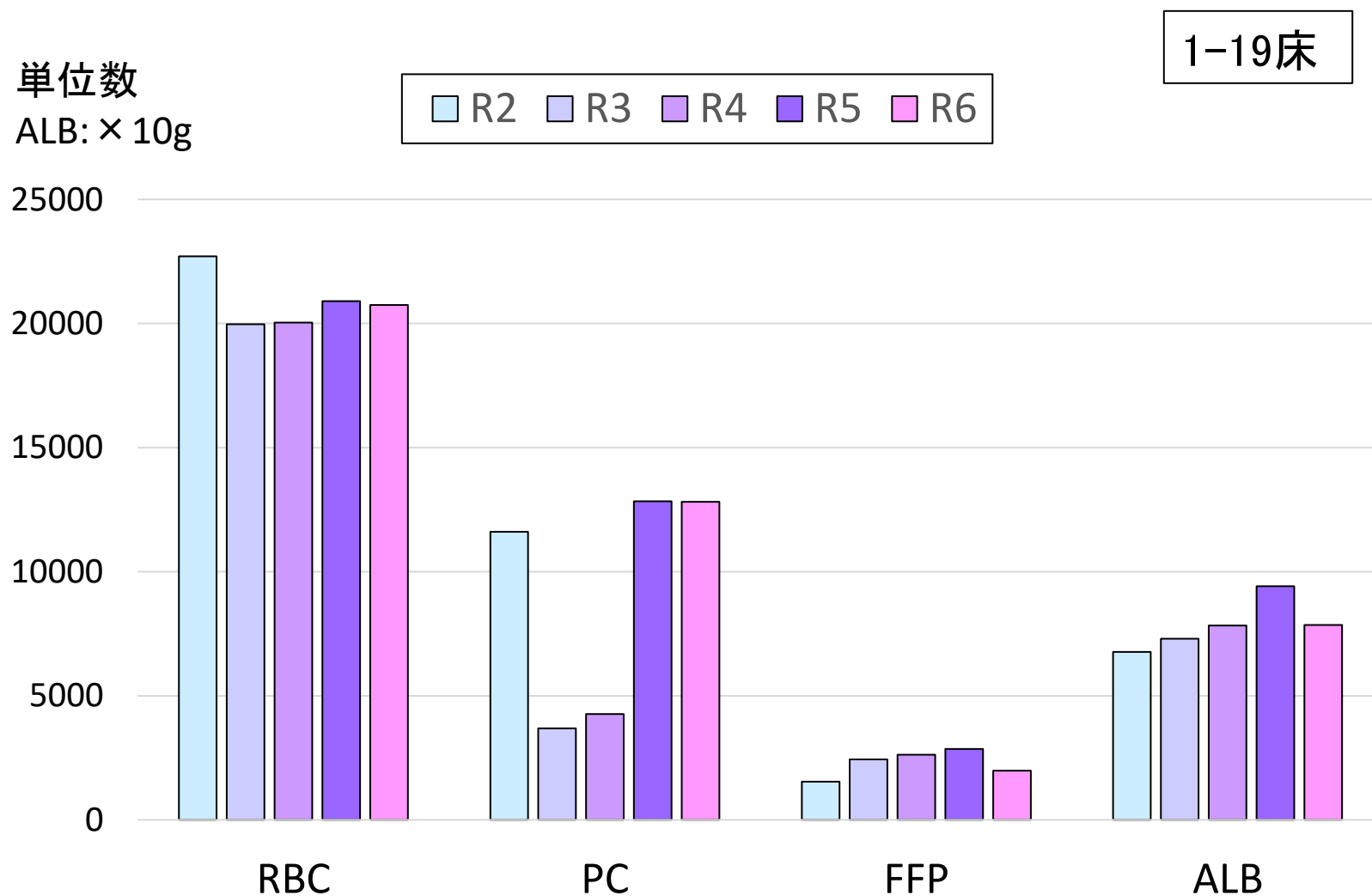


図4 各血液製剤使用量(無床診療所)

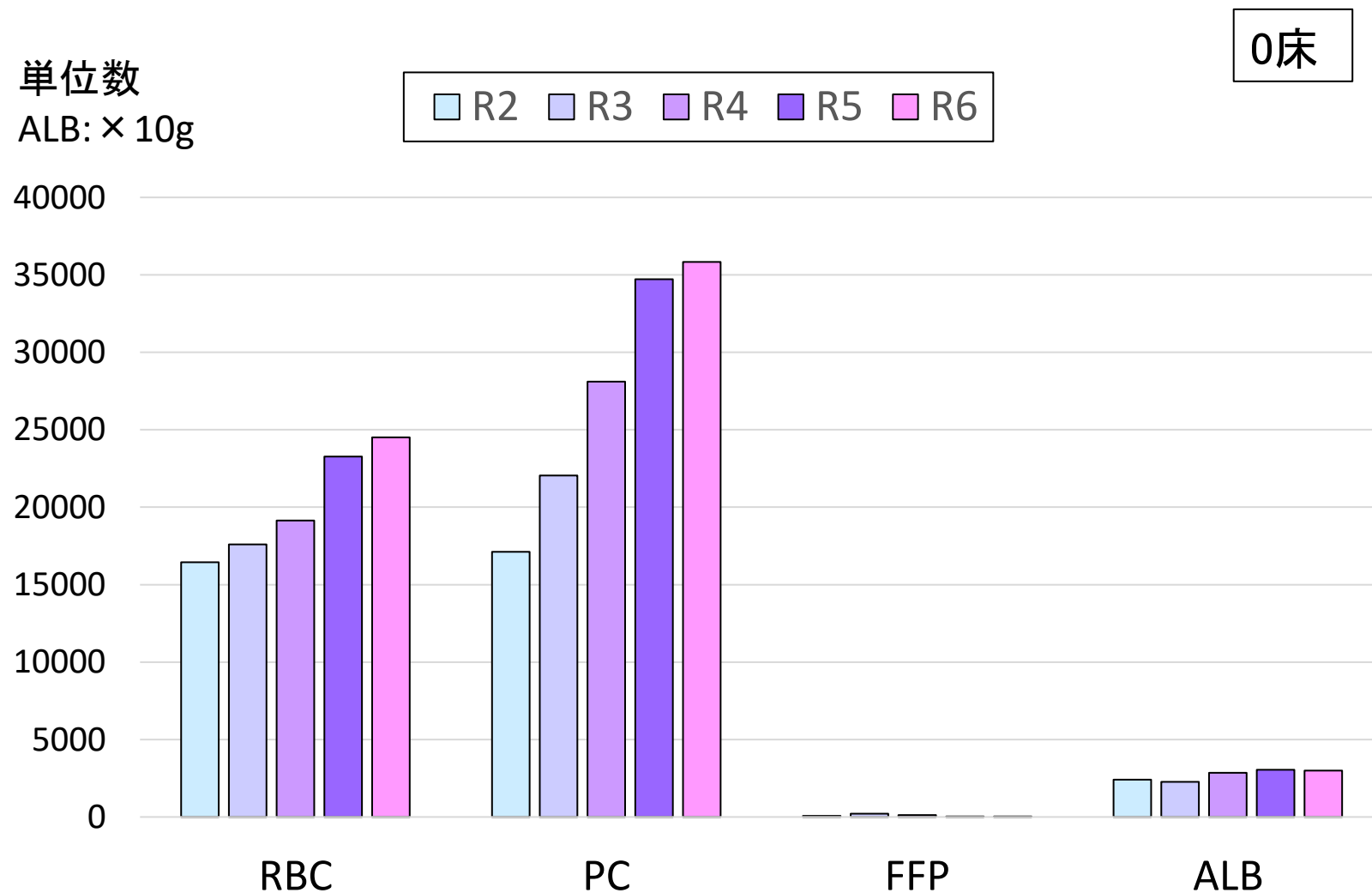


図5 RBC、PCを使用した施設数と使用量/施設

棒グラフ: 施設数
折れ線: 使用量/施設

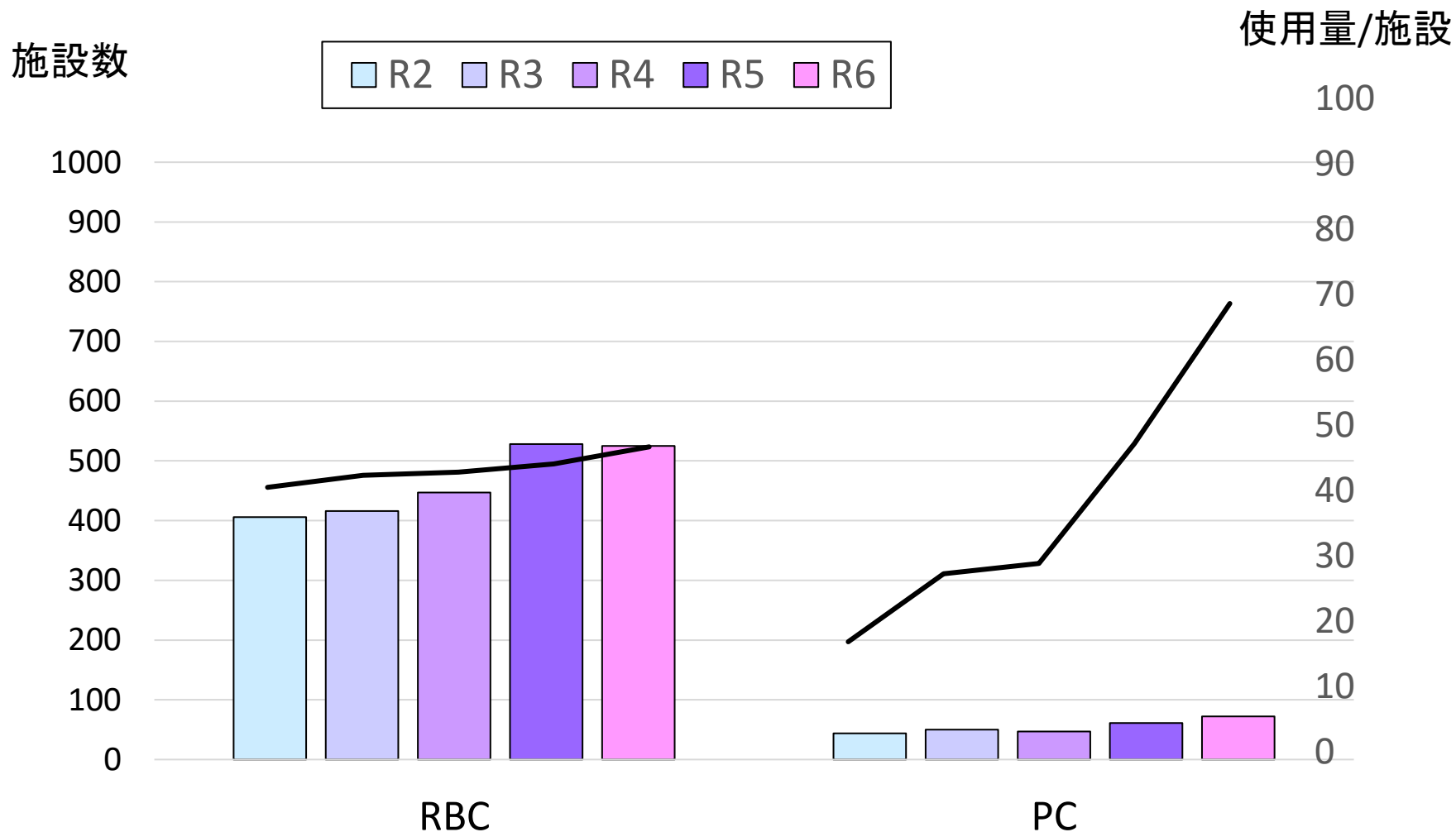


図6 全身麻酔と帝王切開の状況

棒グラフ: 施設数
折れ線: 件数/施設

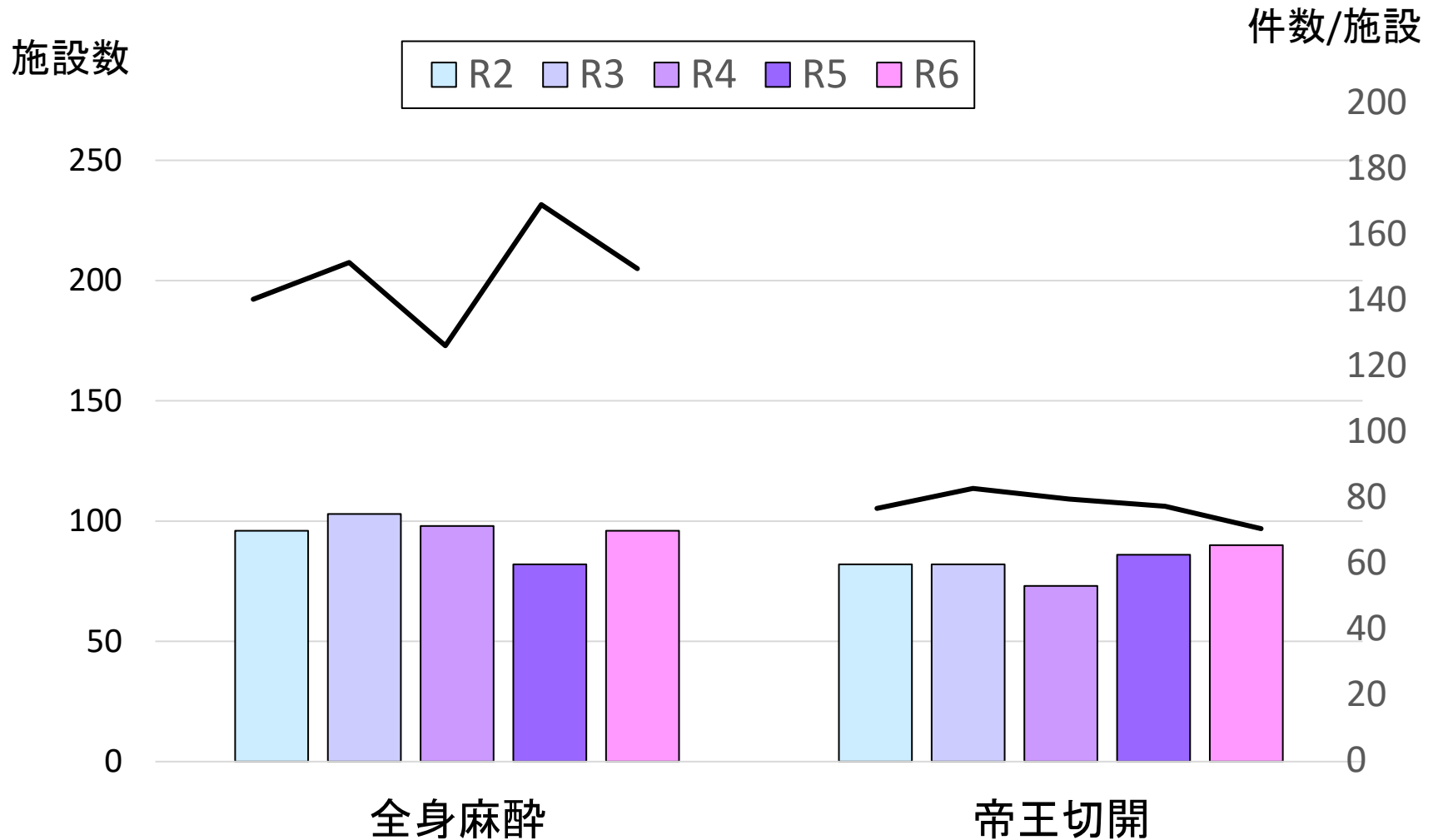
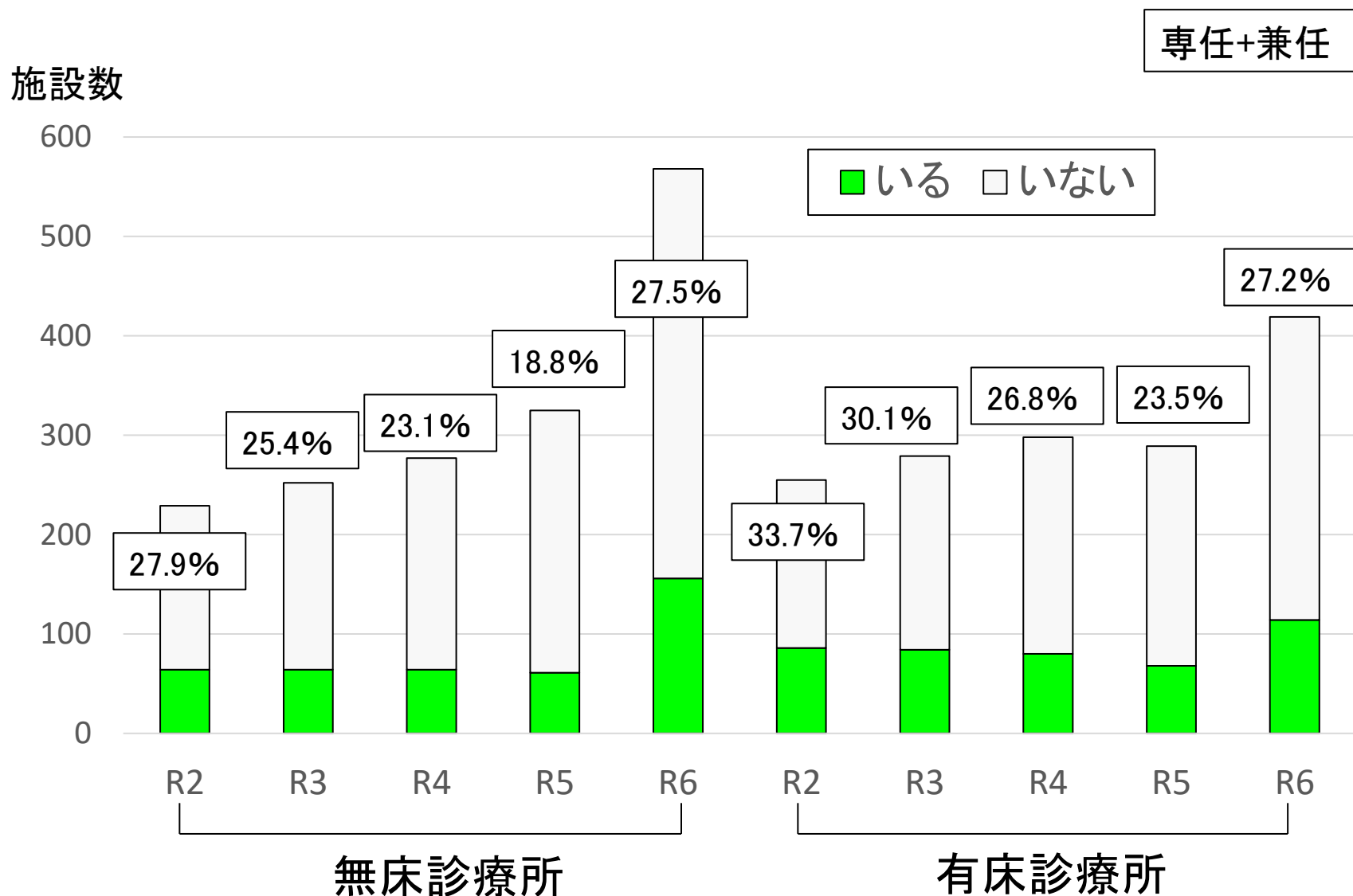
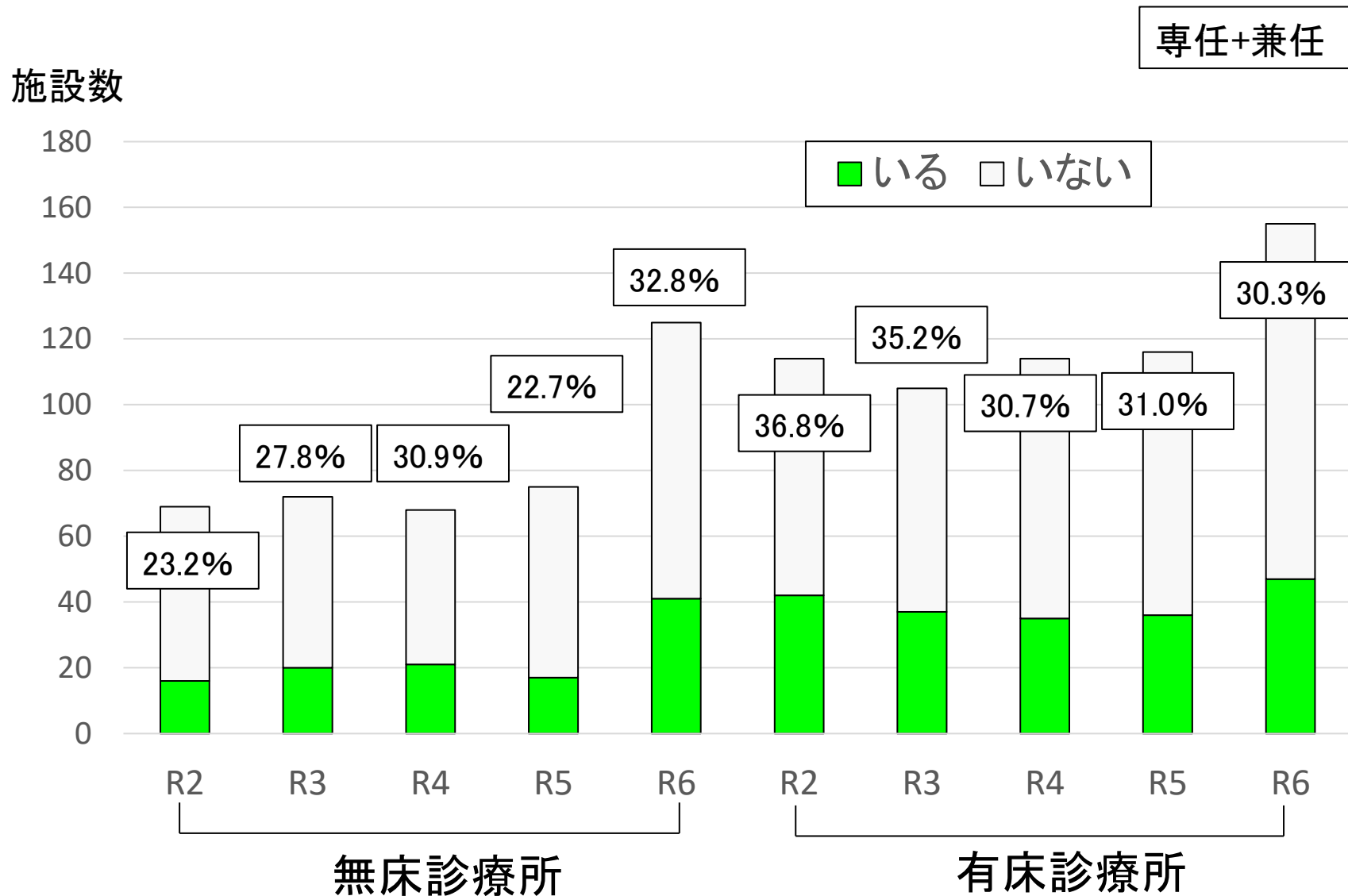


図7 輸血責任医師の在籍



* R6回答施設の経時的データを集計

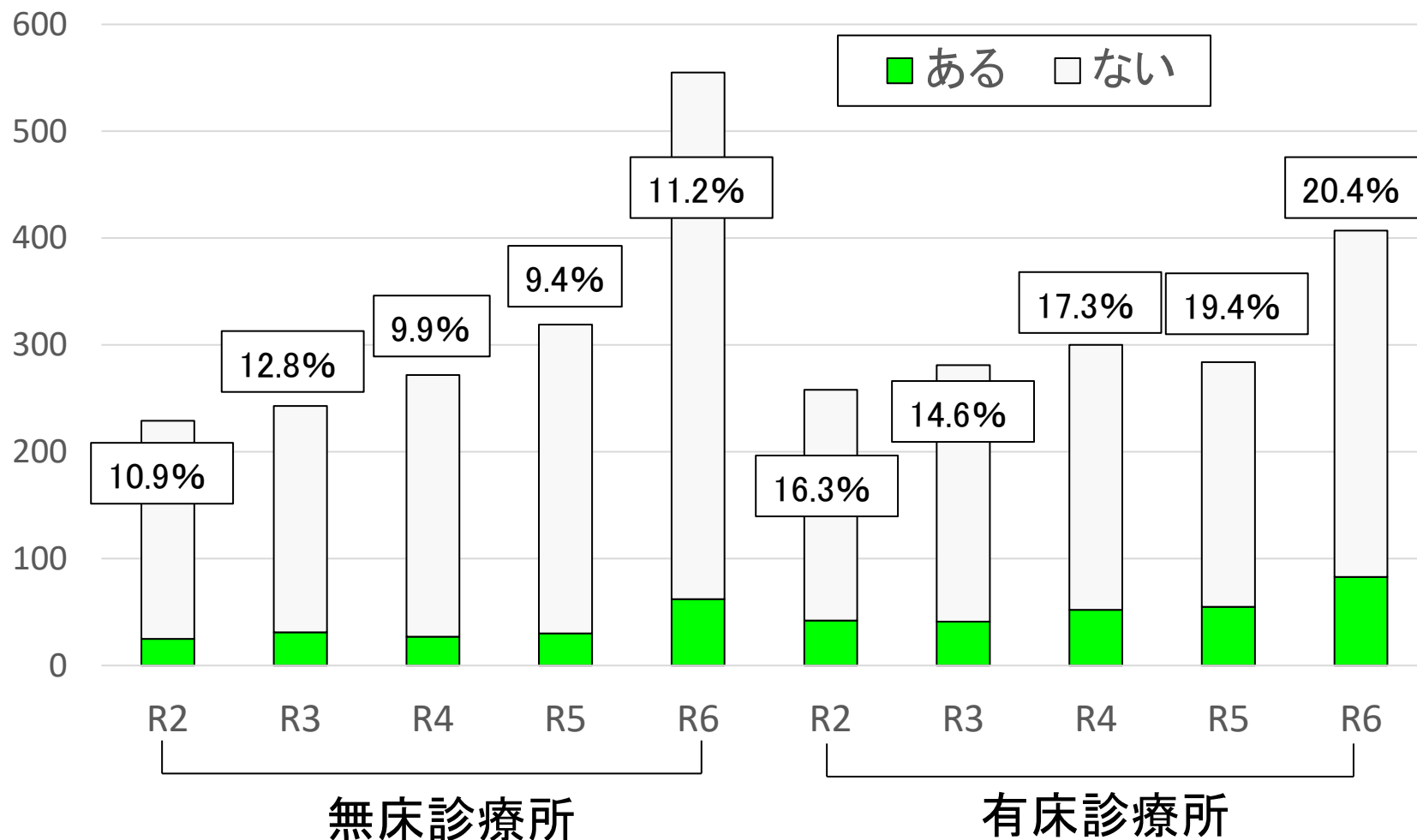
図8 輸血担当技師の在籍



* R6回答施設の経時的データを集計

図9 輸血療法委員会の有無

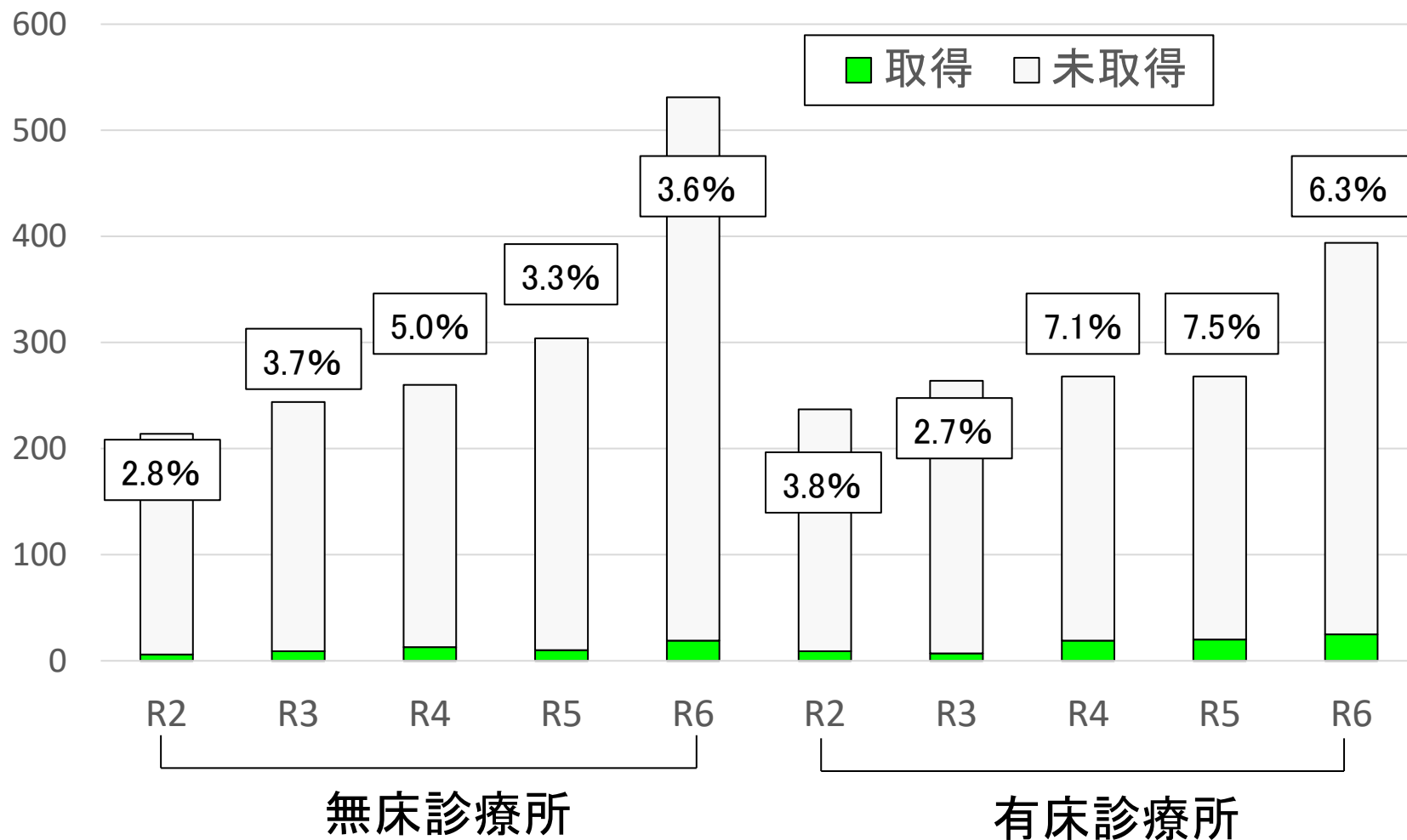
施設数



* R6回答施設の経時的データを集計

図10 輸血管管理料取得率の推移

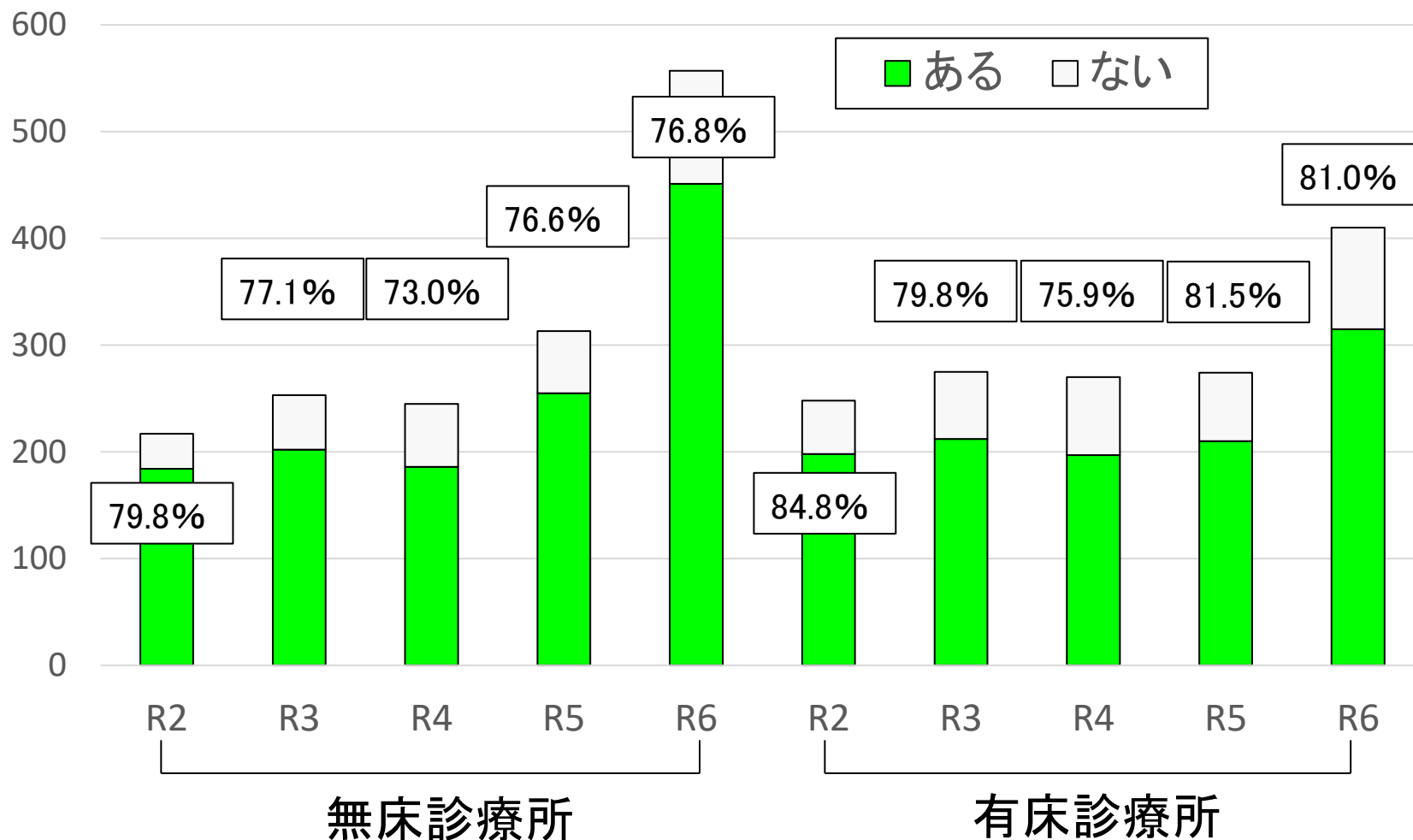
施設数



* R6回答施設の経時的データを集計

図11 院内の輸血療法マニュアル

施設数



* R6回答施設の経時的データを集計

図12 輸血用血液製剤の保管庫(有床診療所)

1-19床

施設数

R2 R3 R4 R5 R6

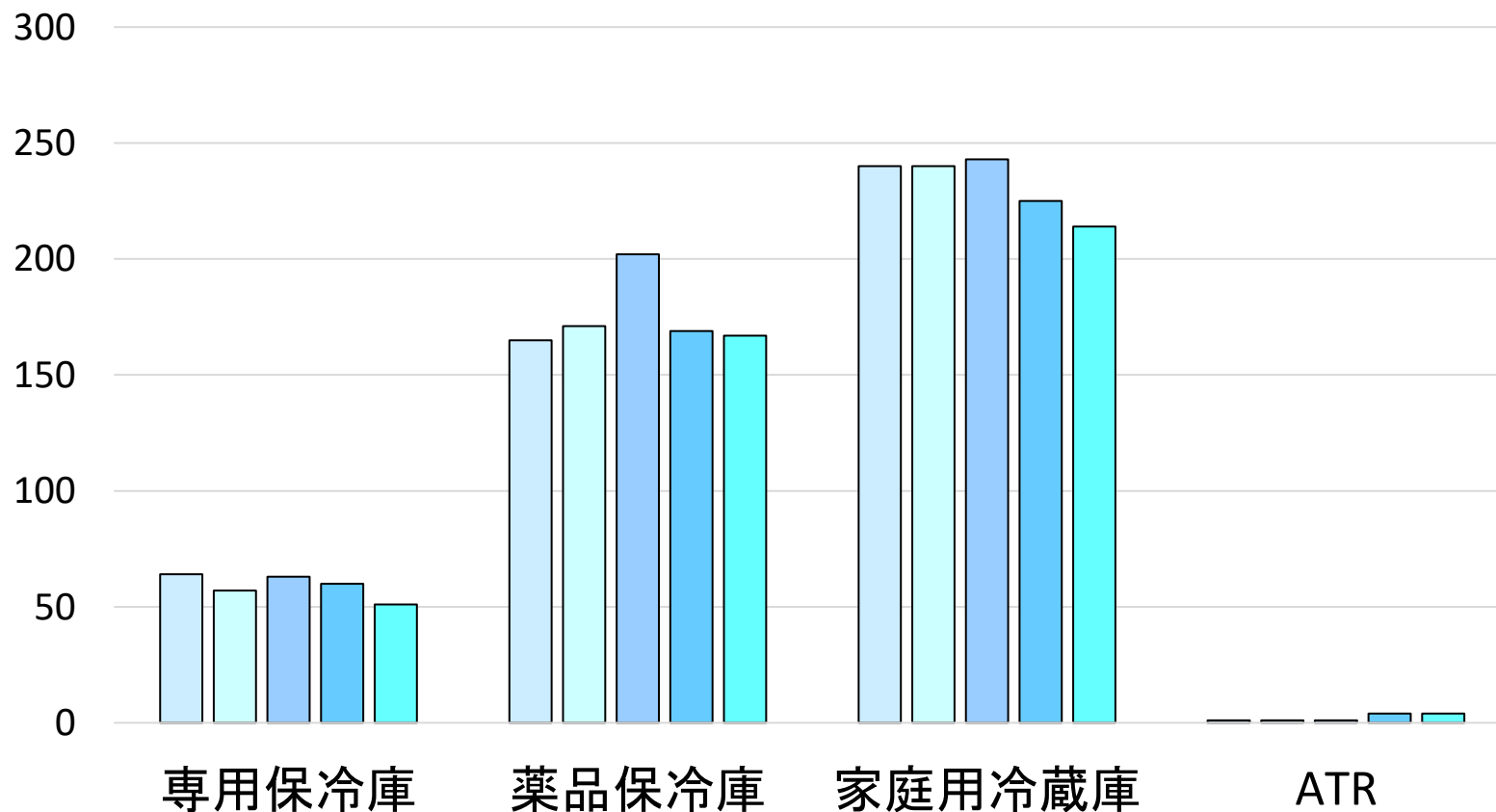


図13 輸血用血液製剤の保管庫(無床診療所)

0床

施設数

R2 R3 R4 R5 R6

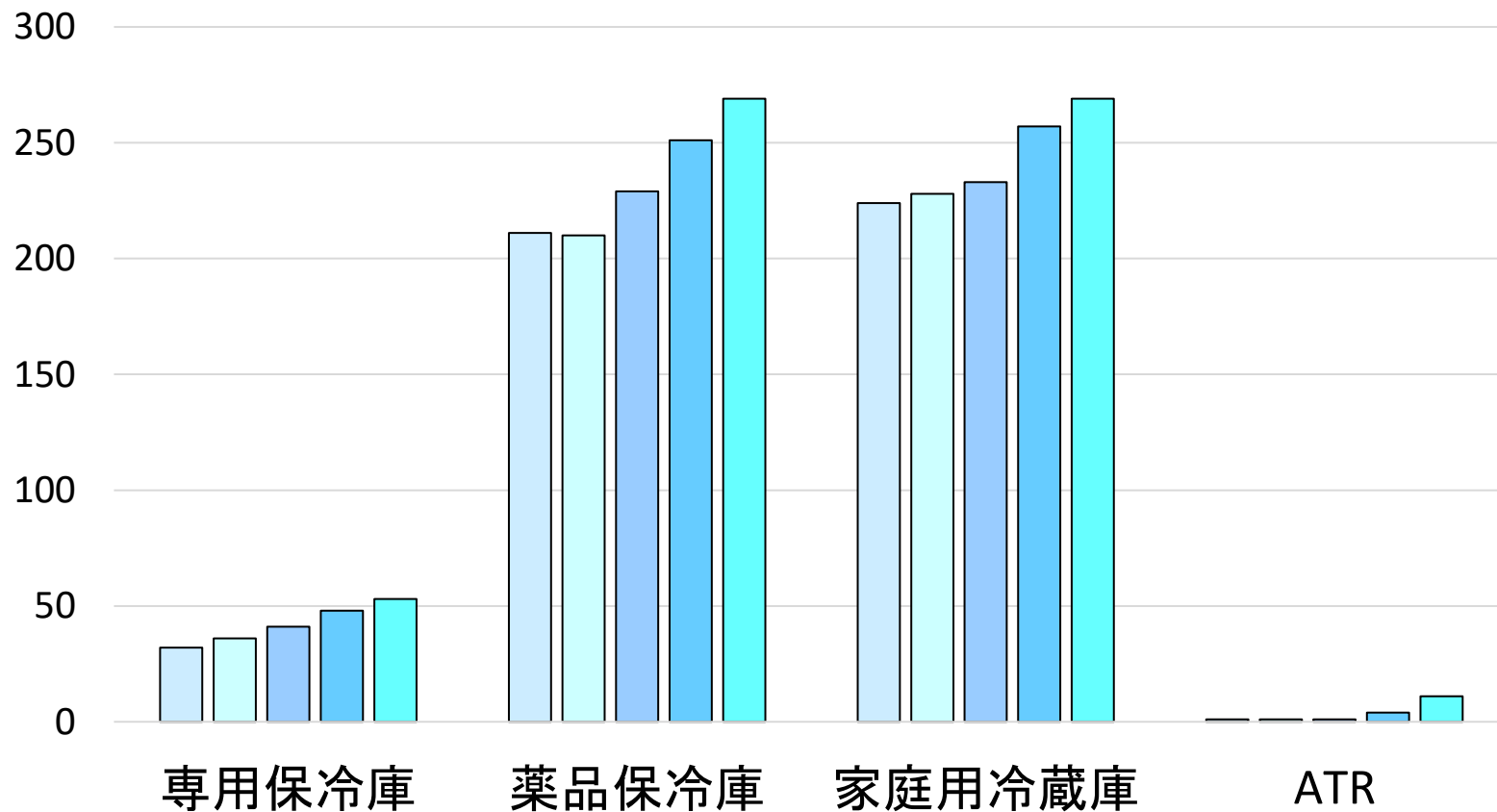


図14 交差適合試験の担当者(有床診療所)

1-19床

施設数

R2 R3 R4 R5 R6

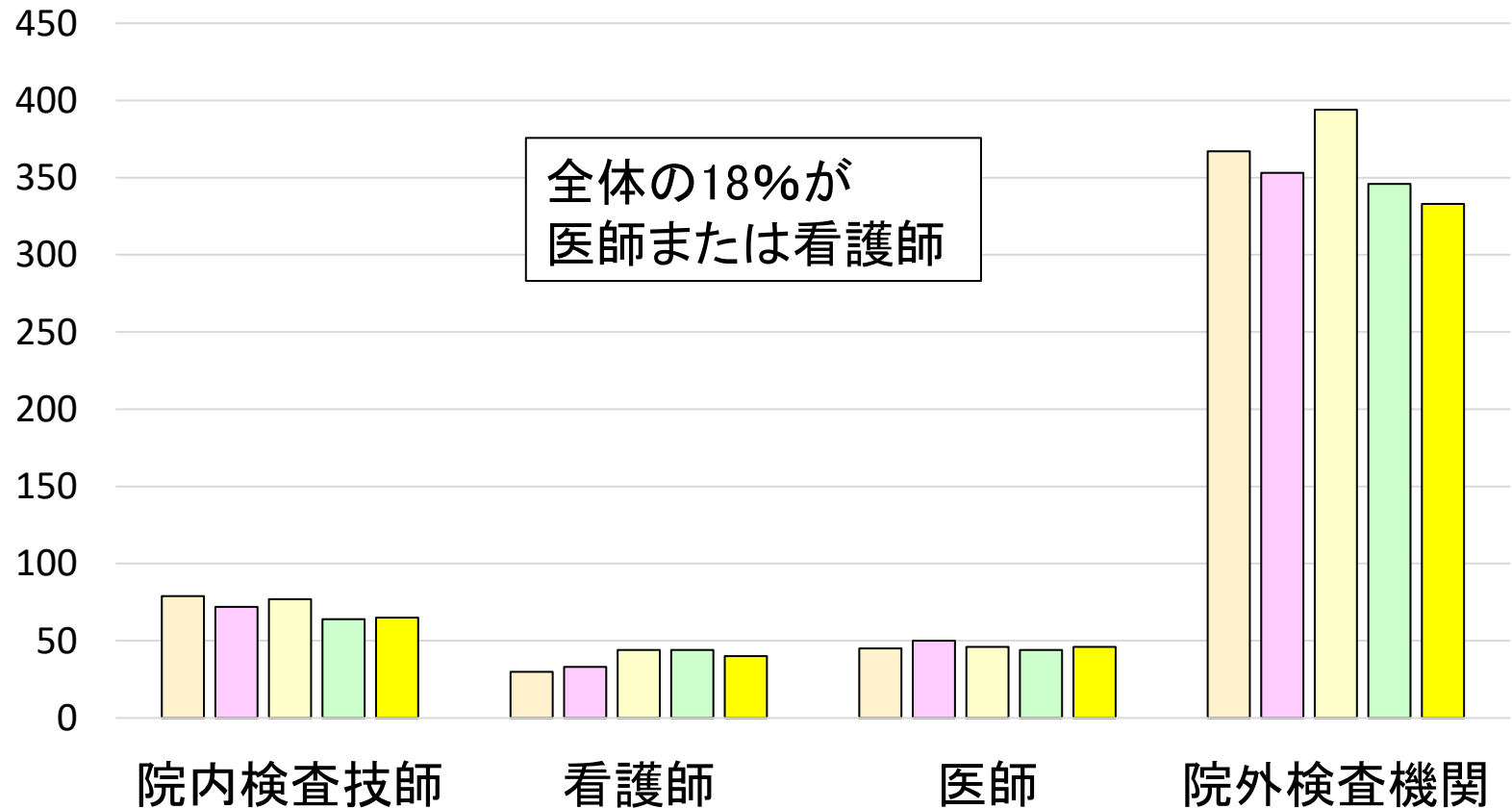


図15 交差適合試験の担当者（無床診療所）

0床

施設数

R2 R3 R4 R5 R6

600

500

400

300

200

100

0

全体の8%が
医師または看護師

院内検査技師

看護師

医師

院外検査機関

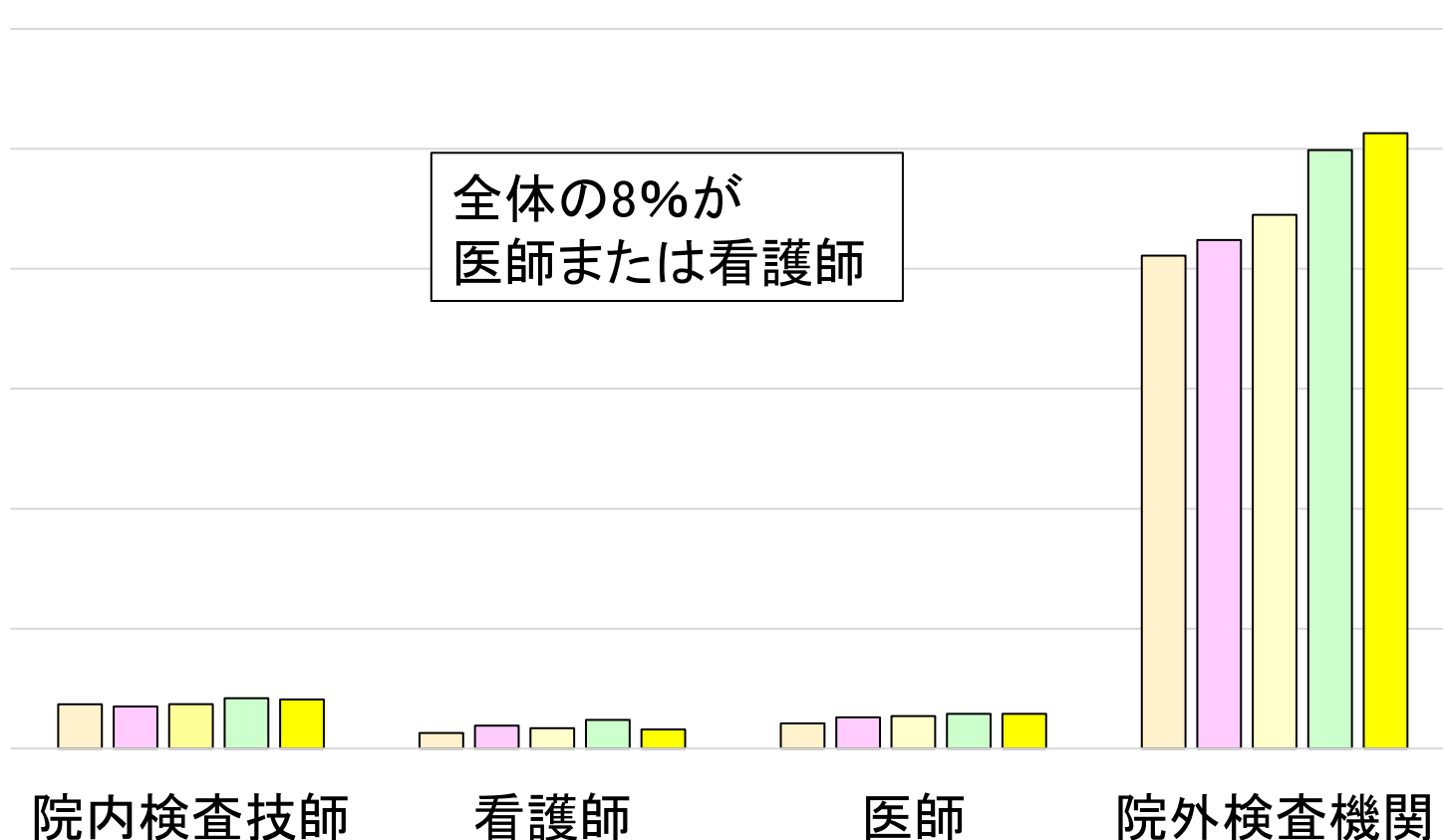
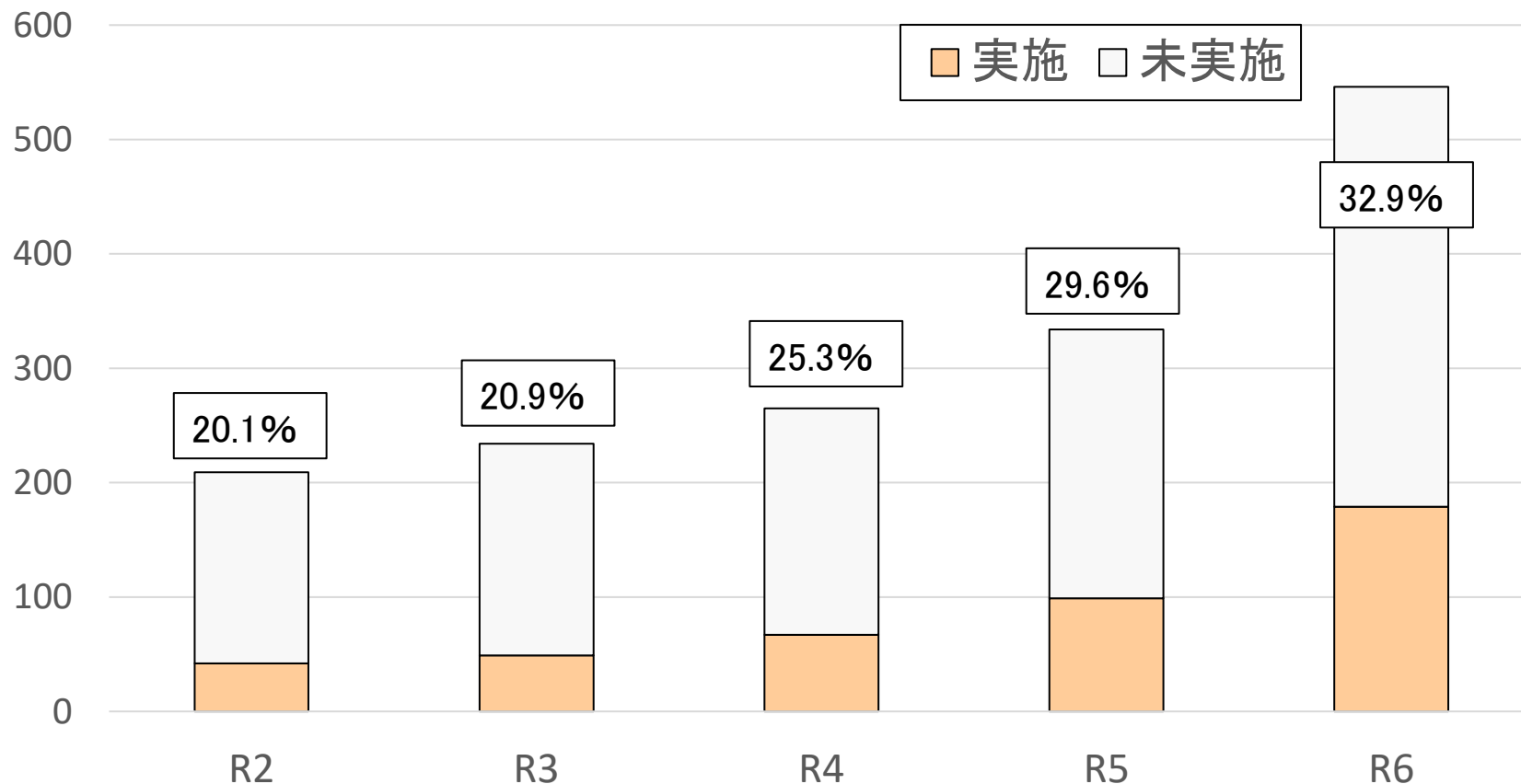


図16 病院外輸血を行った施設

無床診療所

施設数

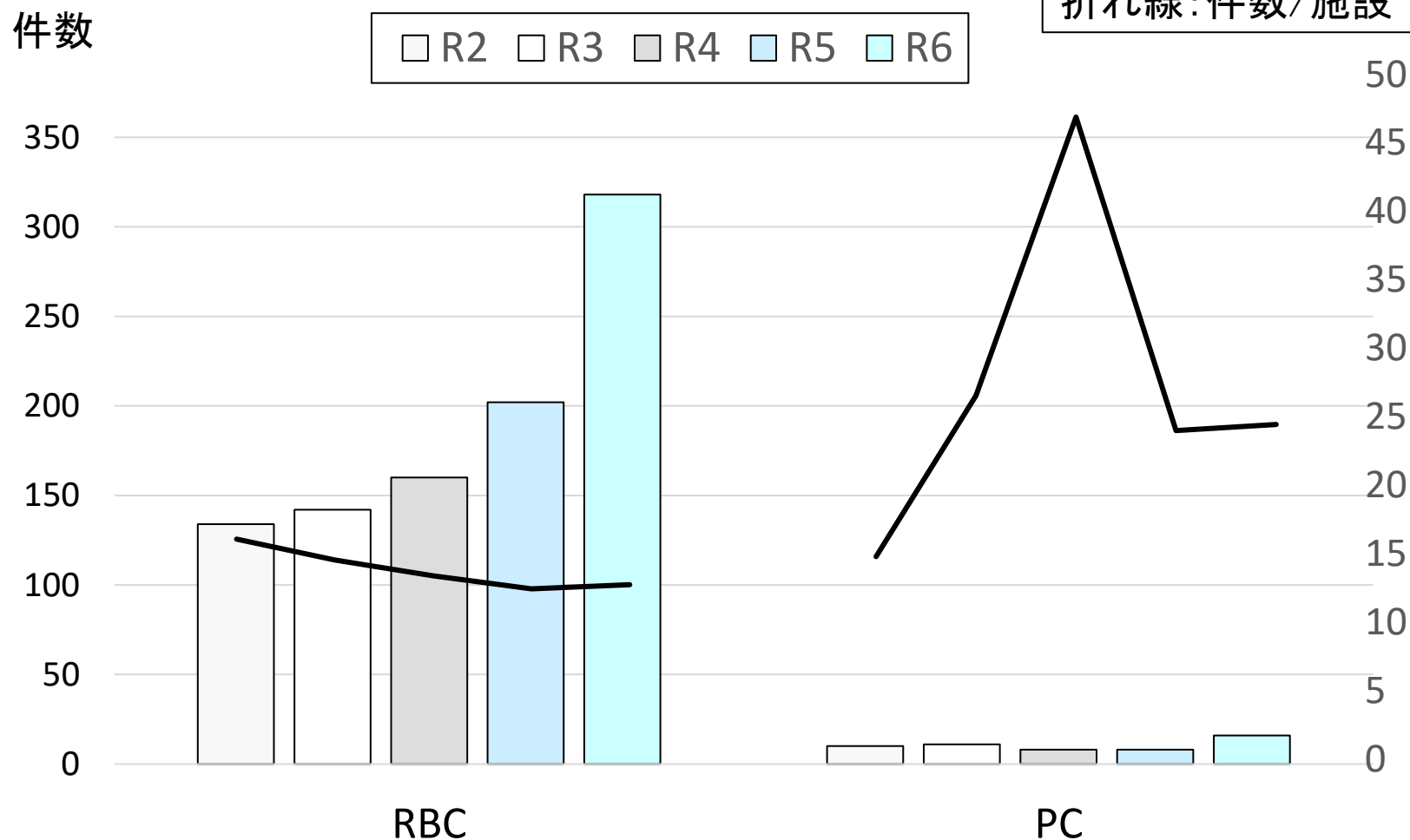


R6の病院外輸血実施施設のうち93%は在宅、7%は介護施設

* R6回答施設の経時的データを集計

図17 外来での輸血件数

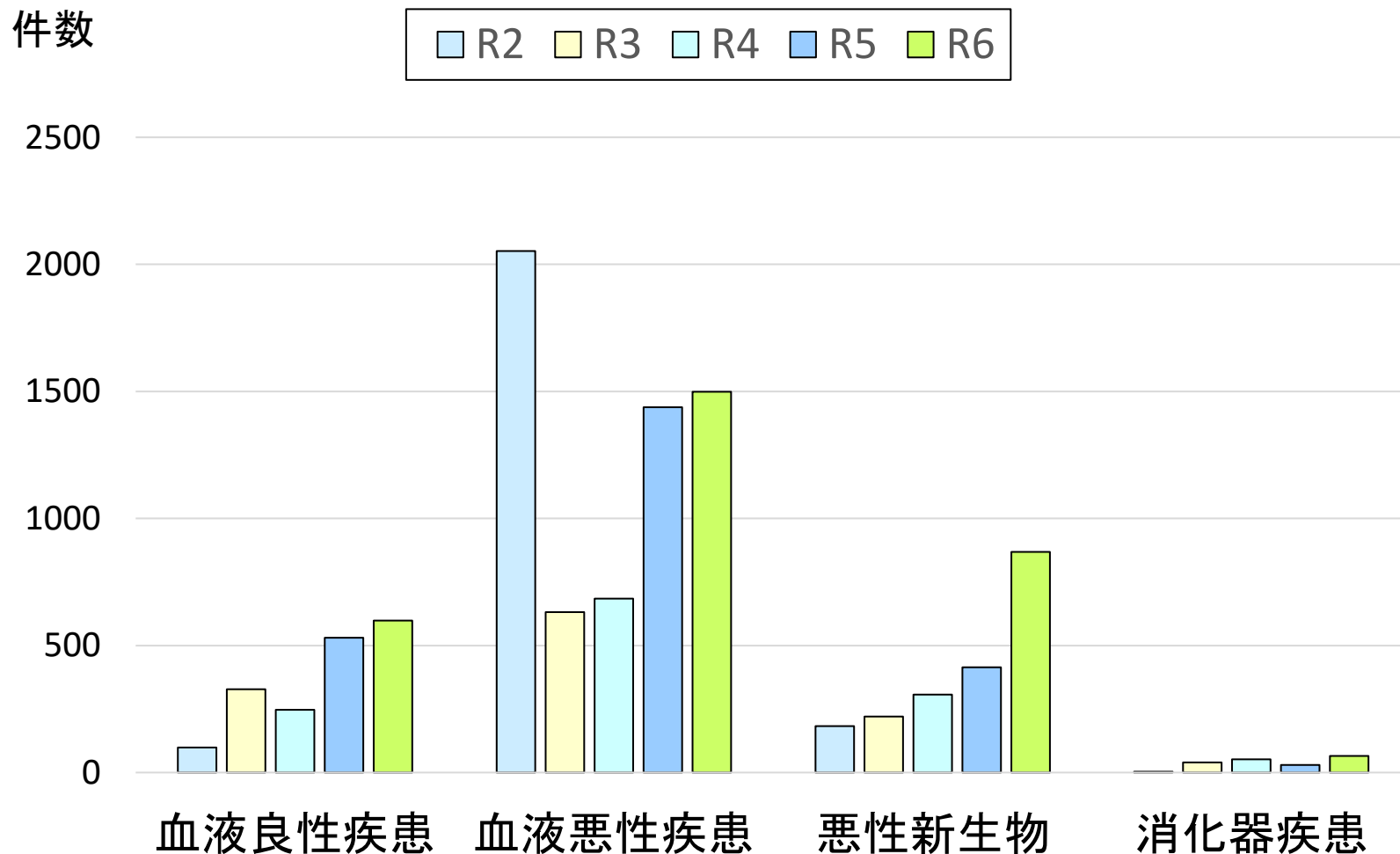
無床診療所



* R6回答施設の経時的データを集計

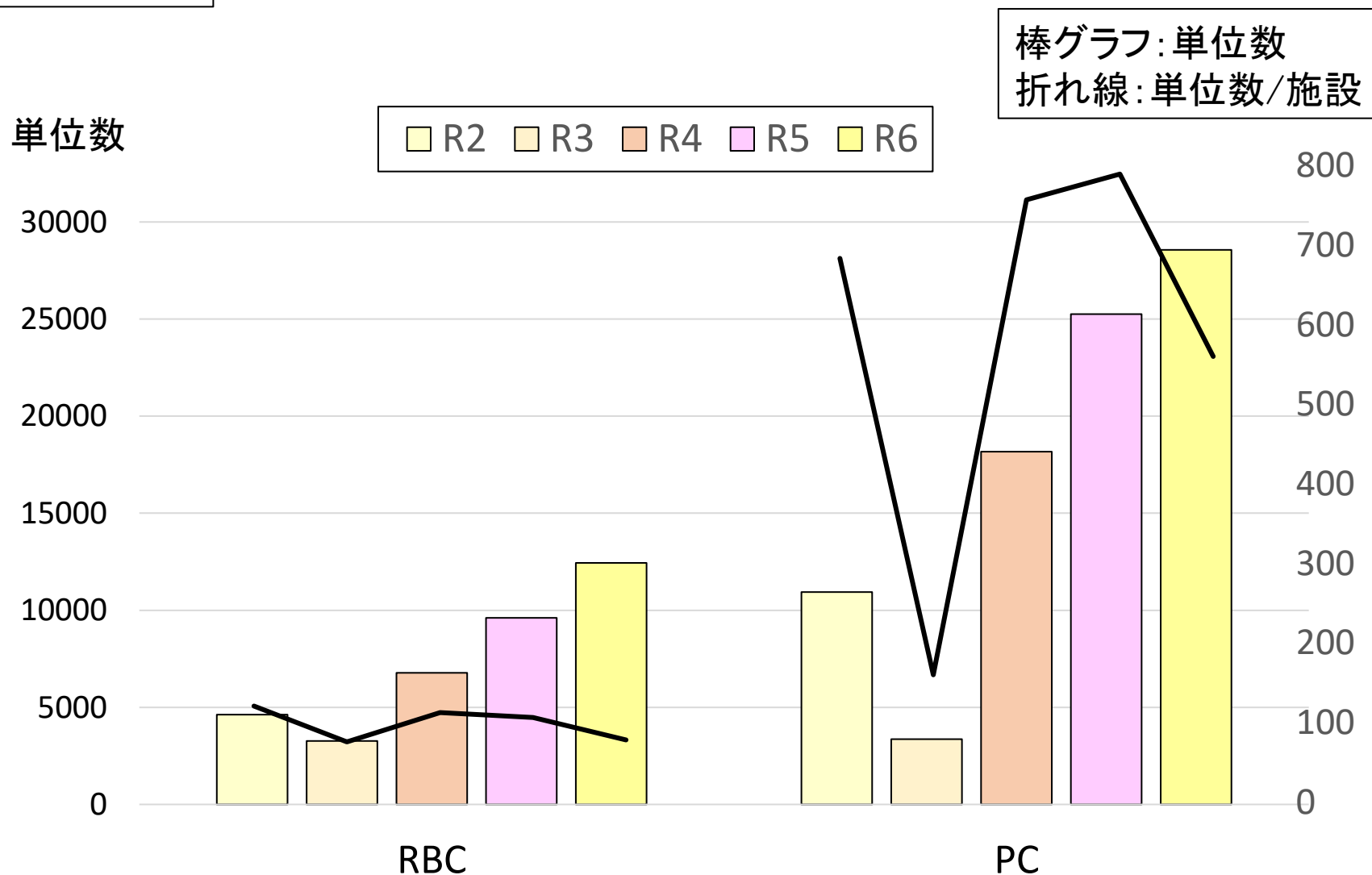
図18 病院外輸血での患者疾患(件数)

無床診療所



* R6回答施設の経時的データを集計

図19 病院外輸血での輸血量



* R6回答施設の経時的データを集計

診療所での輸血状況のまとめ

- 直近5年の血液製剤の使用量推移をみたところ、無床診療所でのRBCとPCの増加傾向がみられた。前者では輸血実施施設数の増加、後者では1施設当たりの使用量増加が主な理由であった。
- 輸血の安全管理体制に大きな変化は見られなかった。
- 無床診療所での在宅輸血の輸血使用量は実施施設の増加と共に上昇傾向がみられている。
- 診療所での輸血療法は検査体制、血液製剤の保管、マニュアルの整備などに課題があり、直近5年での改善はわずかに留まっている。

結語

- 日本でも在宅輸血が拡大傾向であることが血液製剤使用実態調査のデータから示された。
- 直近5年で診療所での輸血管理体制の向上はわずかであり、安全かつ適正な輸血療法の実施に向けた具体的な対策が望まれる。